真・恋姫無双～ドキッ銀さんと一刀の三国生活～

蒼鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双～ドキッ銀さんと一刀の三国生活～

【Ｎコード】
Ｎ１１４４Ｈ

【作者名】
蒼鬼

【あらすじ】
銀時達が美術館の警備を依頼され仕事を引き受ける。ところがそこで見かけた少年に違和感を覚え張り込む、夜遅く美術館の警報がなりそれにきずいた銀時が犯人を捕まえようとすると鏡が割れ光を放つ。ご存知笑えて泣ける銀さんと新たな仲間を加え三国志の世界で大暴れ、銀魂キャラ続々登場していつもがお祭り騒ぎ！さてさて大丈夫なのか？

始まる前にお詫び（前書き）

前作、真・恋姫無双～ドキッ笑いだらけの銀魂演技～に新たにメンバーを追加した作品です。

始まる前にお詫び

ここは江戸、歌舞伎町。

スナックお登勢の二階にある万屋屋銀ちゃん

ソファーに寝そべってジャンプを読んでいる男

その男・・・・・万年金欠、殆ど仕事をしない、大の甘党、死んだ魚の目をした男

常人離れした脚力、剣腕を持ちながら仕事に生かせていないオーナー

その男の名は、坂田　銀時。

「ちょっとまてええええええい！！何だその紹介、もっと他にあるだろう！昔は白夜叉って言われてブイブイビクトリーしてたーーっとか！」

この男今ではこんなんだが攘夷時代、血刀を振るい新時代を築いた

「作品ちっがーーーーーう！！」

「確かにそう言う部分リンクさせる人もいるかも知れないけど～銀さん只の剣術バカじゃねーーーから！」

「銀さんさっきから誰と話しているンですか？」

万屋屋、従業員（主に雑用係）の新八が銀時に声を掛ける。

「一言よけーーじゃーーーーー！！」

ナイスツッコミ。

「大体誰何だ？いい加減出てきたらどうだ？」

ちっしゃ～ね～な～

辺りは光を放つ。

光がおさまるとそこに居たには黒いコートを着た青年だった。

「あっあんたは・・・「「「作者新ポポス3世！！！」」」

寝ていた神楽も起きてびっくりする。

「どうも～」

そう言った瞬間銀時に殴られた。

「てっめえええええ、俺を異世界に飛ばしておいて、しかも後少ししたら活躍できそうなのに！！更新さぼりやがってーーーーー！！」

銀時はポポスの胸倉を掴む、

「・・・・す、すみません。実は謝りに来ました」

「えっちょどう言う事ですか？」

「はい、実は久々に書けそうだったので書こうとしたら作者のパスワードを忘れてしまい、ろくにメールもやった事が無かったので前作「真・恋姫無双～ドキッ笑いだらけの銀魂演技」が書けなくなってしまったので新しく作者登録をして新たに作品を書こうとしていますが・・・まず、前作を楽しみにしている人の期待を裏切った事も含めて今回出させて頂きました」

ポポスは正座をしながら語る。

「でも、これからパスを忘れないように更新も早めに致しますのでよろしくお願いします」

「わーったよ、で前作とどう違うんだ？」

銀時が聞いてくる

「そーネ。私も聞きたいアル。」

「では、説明いたします。前作で登場させようとしなかった北郷一刀君を出そうと思います。
また、前作ではヅラの次に辰馬を登場させる気でしたが今回も登場させます。
あとは、左慈と宇吉、そして・・・・と全部言うと面白くないので此処までとさせていただきます。」

「まーこんなバカでどーしよねー作者だが、応援をよろしく頼む」

「感想など、出して欲しい銀魂キャラを教えて欲しいネ。」

「また、喰霊、全てを取り戻す者、人生と言う迷路を追加設定を入

れて新たに連載するつもりです。とにかく頑張ります」

「でも、今回出ても良かったんですか？」

「今回は読者さん宛ての手紙みたいなものでお詫びの物です。私は作品には一切登場しませんので」

銀時は頭を掻きながら前にでる。

「もういいじゃねーか。じゃ作品紹介皆で言うか？」

「せーの！「「「「真・恋姫無双～ドキッ笑いだらけ銀魂演技～改め真・恋姫無双～銀さんと一刀の三国生活～始まるぜ！／ネ！／よ！」

始まる前にお詫び（後書き）

以上お詫びでした、迷惑を掛けてすみません。

第零訓：プロローグは大抵短い事が一般的（前書き）

タイトルが長いです。（無駄に・・・・）
あと後書きも・・・後書きじゃないかも知れません。

第零訓：プロローグは大抵短い事が一般的

「あ～あ、眠い～」

デスクのソファーに寝転がってジャンプを読んでる男、万屋屋オーナー兼この小説の主人公坂田銀時である。

「やっぱ俺もうジャンプとっくに卒業しても可笑しくないんだよな～、でも生活費がヤバクてもついつい手にとってしまう、なんでだ？ジャンプには魔法か呪いが掛かってンのか～？」

「銀さんどーするんですか？食費も底が見えて来ましたよ」

従業員の新八が通帳を見せて言う。

「よし、稼いでこいネ、ダメガネ」

激辛毒舌娘の神楽が新八に冷たく言う。

「お前何様のつもりだーーーー！それとダメガネ言うな！」

「言われて欲しくなけりゃ、酢昆布3年分私に献上するアル。」

「一日の摂取量が分からないンだよ！」

そう話していると、インターホンがなる。

「悪りーが新八出てくれ、新聞の勧誘だっつたら日経とってるって言っといてくれ」

新八は玄関の戸を開けながら「ハイハイ、新聞なら間に合ってますよ～」

戸を開けると其処にはスーツを着た男がボディーガードを連れて立っていた。

「金さえ払えばなんでも仕事をしてくれる万屋屋は此処ですか？」

「・・・あ、ハイ。」

新八はゆっくり後ろを向き銀時の所に向かった。

「銀さん！」

「どーしたんだよ、イキナリ大声出して」

「仕事がきたんですよ！しかもすごそうなの！」

銀時は目を見開き「マジでか！？」と驚く。

「お客様を呼んでこいヨ新八」

「だから何で上から目線ンンンン！！」

そうツッコミながらも依頼人を呼びに行く新八。数秒して新八が依頼人を連れて戻って来た時には部屋が片付いていて銀時はいい姿勢で座っていた。

「貴方が、万屋屋のオーナーですか？」

「まぁな」

「ああ、申し送れました。私美術館の管理人兼電気会社の社長をやっております。」

そう言いながら名刺を受け取る銀時。

「で、依頼とは？」

「実は美術館の警備を明日一日お願いできますかな？報酬は弾みますよ。」

男はボディガードに頼みトランクを開けさせる底には銀時達が目を輝かせ報酬を見る。

「報酬は明日の警備が終わり次第お支払いします。」

「でも何で俺達なんだ？」

「あ～ハイ、先日から中国歴史展を開いていまして、その展示会が明日までなんです。こういう場合最終日が大抵盗まれる可能性が多くて、普通の警備員じゃ何と言うか心細くてですね。こう言うのは何事にも対応できる万屋屋の皆さんの方が何かと安心できると思いまして・・・」

「そうですか」

話が長くなった為銀時の態度が段々悪くなってきた。

「ハイハイ、明日な分かった引き受けよう」

「ありがとうございます」

男はそう言って帰っていったとさ、めでたしめでたし。

「めでたくないから、終わりじゃないから！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

翌日

銀時達は朝早くから美術館にきていた。ちなみに定春は留守番である。

「銀さん館内は飲食禁止ですよ」

「だーい丈夫だって新八君、展示品だって触られてたり汚されたくないからガラスの向こうに置いてンだよ！」

クレープ片手に言う銀時。

神楽と言えば

「おーこれがトランシートか！」

「トランシーバーね神楽ちゃん」

「あれ、そこに居るのは新八君じゃね～か」

新八が振る返るとそこには長谷川がいた

「長谷川さん、最近会わないと思ったら此処で働いていたんですか？」

「ま～ね」

頭を掻きながら笑う長谷川

「何だマダオまた仕事変えたのか？たくっ何やっても長続きしないアルな」

「ちょっ神楽ちゃん、長谷川さんが仕事を変えたりする原因て僕等にもあるからね」

「五月蝿いねダメガネ」

「イチイチダメガネって言うな！」

「おっ長谷川さんじゃね～か」

クレープを食べ終えた銀時が新八達の方を向いて言う。

「よう、銀さん今日はどうしたってんだ？」

「まあ、仕事でな今日一日此処の警備を任されたンだよ」

「マダオと違って報酬は札束びっしりアルヨ」

神楽は長谷川に嫌味たらしく言う。

「オジサンだって頑張ってんだぞ！どうせ俺は・・・・ん？」

「如何したんですか長谷川さん」

「いや、今あそこで銅鏡見てる奴、昨日、一昨日も居たんだよ」

長谷川が指を指した先には新八と殆ど歳の変わらない少年がいた。

「学生アルか？勉強熱心でいい事ネ」

「いや、違うだろ、それより銀さんちゃんと働かないといけませんよ。ほら仕事仕事」

冷静にツッコム新八。そして、その場を離れる一行だが銀時だけはその少年の違和感が妙にきになって仕方が無かった。

それから何も起こらず閉館時間を迎えた。

「ありがとうございます。それでは報酬です」

「やりましたね銀さんまた暫くはお金に困りませんね」

「そーね。酢昆布食べ放題ね」

「ん？ああ、悪いがお前等先に帰ってろ」

銀時は美術館を見て歩いていく。

「どうしたんですか？」

「ジャンプ買ってくる」

夜になり銀時は美術館の前で張り込んでいた。

銀時が何故こんな面倒な事をやるのかと言うと・・・・泥棒登場→展示品を盗む→泥棒が出てくる→銀さんが捕まえる→警察に突き出す→銀さんお手柄→お礼金を貰える→テレビ出演＝銀さんモテモテ・・・・っと言う考えである。

「つったってそんな旨い話が在る訳ねーよな～」

欠伸をしながら言う銀時。

すると、その瞬間警報が鳴り出した。

「っえーーーーー！！どう言う事願い叶っちまったよオイ！」

銀時はそうツッコミながらも向かってくる足音に気付いた。そして瞬時に茂みから出て泥棒の前に立つ。

「オイオイ、それは美術館のだろ！３００円上げるから返してきなさい」

「ちっ」

「年上に向かって舌打ちですか～コノヤロウ」

「其処を退け！」

「そうはいかねぇ、テメエ捕まえねーと『銀さん有名モテモテの金持ち計画』がパーになるんでね」

男は盗んだ鏡を持ち直して銀時に蹴りかかった。

「うおっ！！」

銀時はスレスレで避けた。

「ちっ、外したか」

「そうかよ、ンじゃこっちも腕尽くで取り戻すしかねーよーだな」

銀時はそう言いながら腰に差してある木刀を構える。

「そんな、モノで俺に勝てると思っているのか？」

「そう言うのは勝ってから言うモンだぜ」

銀時は地面を蹴り男に切りかかるが男はそれを足で受け止める。

次に銀時は空いている足を男に向かって蹴る。

男は吹っ飛ぶが何とか着地する。

「ちっ、もう手加減せんぞ殺す！！」

「あらら、今のは結構力入れて蹴ったンだけどなーオイ、お前ご飯に鉄やら鉛やらかけて食ってンのかよ！」

銀時は再び木刀を構え男に切りかかる。
男は木刀をかわすが次の瞬間良きせぬ出来事が起こった。それは避けたは良いが男が脇に抱えていた鏡が木刀に当たり割れてしまった事だ。
男はそのショックで鏡を落とす。
「あ～あ、やっちまったなオイ、やっちまったよ」
銀時は手を顔に当て言う。
そして、割れた鏡から光が漏れ出した。
「何だコレは！？」
「ちっ、もう始まりやがったか」
「どう言う事だ少年Ａ！？」
「誰が少年Ａだ！！・・・・・・・・・・・・飲み込まれろ、それがお前に下る罰だ」
「何言ってンだか分からねーンだよ、日本語話せ！日本語！！」
銀時は何が起こっているのか分からずかなりの混乱状態だ。
「この世界の真実をその目で確かめるがいい」

その言葉を最期に光は強まり、銀時の意識も遠のいていった。

第零訓：プロローグは大抵短い事が一般的（後書き）

「ハイど～も作者代理人、坂田銀八です。この後書きのコーナーは皆さんの疑問・要望・作者から皆さんへの頼み事を紹介したり、答えたりするところです。」

北郷「そんな、コーナー何時までやるんですか？」

「ハイ、アホの北郷君の質問に答えましょう。質問とかが、ある時意外はやりません」

「と言う訳で早速皆さんに聞いてみたいと思います。
次回から銀さんと一刀が恋姫の世界に飛ばされますが
陣営をどう分けようか考えています。銀さんはぼのぼのした感じなので読者の要望により蜀になりますが」

北郷「なりますが？」

「一刀の陣営が決まっていません！此処は読者の皆さんの声を聞きたいと思うので感想で要望が多かった陣営に入れたいと思います。
大体1・2日様子を見ようと思います。
ハイ、それでは今回は終了だ。・・・と言う訳で北郷、廊下に立ってなさい。」

第一訓；困った時は笑って誤魔化せ！！（前書き）

次回から陣営が決まります。
一刀登場です。

第一訓；困った時は笑って誤魔化せ！！

（あれ、雲が白いや・・・・あれ？真っ白なのは俺の頭か？・・・・・・アレ？そういやこんな事前にも・・・・・）

「って朝ーーーーー！！つーか此処何処！！」
銀時は跳ね起きて辺りを見渡す。辺りは山と草原だけだ。
「あ～昨日は飲みすぎたか？幻覚が見えて来た。ん？なんだアレ？・・・・なんだ人か・・・・人ォォォォォォ！！」

銀時は全速力で人（？）駆け寄る。近くで見るとポリエステルで作られた服だ。
「オイ！起きろ！朝飯抜きにすっぞ」
「ヤバイ遅刻だ！」
すると少年は跳ね起きた。

～少年ｓｉｄｅ～
俺が跳ね起きると其処には銀髪の男がいた。
その男は着物を着ていて木刀を腰に差していた。
ｓｉｄｅｏｕｔ

「よォ、目は覚めたか？聞きてー事があンだけどよ此処は何処だ？」
銀時が聞くと少年は周りを見渡し呆然とする。
「えっ？此処何処どうしてこんな所に！？」
少年は考え込んだ。
「そうだ考えろ少年よ！分かったら教えてくれ俺は少し寝るから」
「ってぇぇぇぇぇ！！一緒に考えてくれないんですか！？」

少年は銀時の意外な（新八達に経っては日常的）な行動に驚く。

それから2時間後

「ふぁ～～～～」

銀時は十分な睡眠から目を覚ました。

「少年此処何処だか分かったか？」

「いや、全然分かりません。聖フランチェスカにこんな場所なんて無い筈なんがけど」

「えっ何？フランクフルトとチェス？何それ？」

銀時は首を傾げ少年に言う。

「聖ランチェエスカです。ところで名前いってなかったですよね。俺は北郷一刀といいます」

「あ～ハイハイ、デューク北郷ね」

「俺はゴルゴ13じゃありません！！」

「分かてるって名前似てるンだしボケたっていいじゃねーかよ」

銀時は頭を掻きながら名刺を出した。

「俺は坂田銀時。、銀さんでいいぜ。万事屋のオーナーだ。」

「万事屋・・・・ああ！要するに何でも屋って言う事ですね」

「おっ、分かってるじゃねーか」

それから二人は昨日の事を話し合った。

「つー事はオメーも鏡を取り返そうとして、ンで鏡が割れて気が付いたら此処にいたンだな」

「はい」

「江戸でもねー、ましてお前がいた場所でもでもねー」

一刀は意外なワードに驚いた。

「えっ江戸ってどういう事ですか！？」
「お前が住んでた場所も江戸じゃなかったのか？」
銀時は銀時の世界の状態を一刀に話し、二人はまたじっくりと考える。

「まてよ、ひょっとしたら俺とお前は違う世界にいて同じ境遇から此処に来たって事が今一番正しい考えだよな」
「ハイ、ですよね」
「じゃー誰かが俺達を使い魔として召喚したとか」
「作品が違います！！」
「もしくは俺達が陰陽師とかの生まれ変わりで玉の欠片探しをする為妖怪と旅したり・・・とか？、はたまた俺達がこの世界を救う為、有り難いお経を貰いに西へと向かう為だったりして？」
「全然違うと言い切れます！！」
一刀はなれないツッコミで息が上がっている。

「まっ、どっちにしろ此処に居たんじゃ何もわかんねー。取り合えず街を探っすぞ！！いざガンダーラへ！！」
「だから違います！！」
銀時は頭を掻いた後空に向かって指を指す。

（そうして俺達の旅は始まり、旅先での苦難や人々の出会いがあった数多もの笑いがあった、数多の悲しみがあった。

そして・・・・・・三年の月日が流れた。）

「何、旅を終えた形にしてるンですか！！銀さん、まだ歩いて三時間しか経って無いンですよ。何街の入り口でナレーションしてるンですか！？」

三時間の間にだいぶツッコミが旨くなった一刀だった。

「悪かったって、でもスゲーなオイこの街映画のロケ地見みてーだな。まさかタイムスリップしました～とか無いだろな。どっかにカメラあるだろ！スッタフいるだろ！監督いるだろ！オイ！！」

「銀さん落ち着いてください」

「ああ、ンな事より甘い匂いしねーか？」

銀時はそう言うと走って匂いのする方へ走っていった。

「待ってください、銀さん」

一刀の追いかけるが人ごみでなかなか追いつかないスピードを上げると人にぶつかり倒れた。

「気を付けろよ」

「すいません！！」

一刀は起き上がり辺りを見渡すが甘味の匂いも人ごみで分からなくなっていた。

「・・・・・アレ？俺ひょっとして迷子？」

銀時はご機嫌な顔で甘味屋から沢山の甘味を買う（お金は昨日の報酬の小判が約にたった）

「♪～おーい一刀いいだろ～。・・・・・・アリ？はぐれちまった？」

第一訓；困った時は笑って誤魔化せ！！（後書き）

三年Ｚ組　銀八先生答えてのコーナー。
「ハイ、第一訓始まりました。今回は銀さんと一刀の出会いの話でしたが、あっさりはぐれちゃいました。」

北郷「先生！沖田君が寝ています」
「曹操を呼んでドＳ会議でもやらせときなさい」

「まだ要望が少ないので陣営が決められませんので感想をよろしく、できれば理由も・・・」

「ハイ、と言う訳で今日の授業はお終い。関係無いけど北郷廊下にたってなさい！」

第二訓：大食い対決は優勝しても金を取る時がある（前書き）

いざ、続きです。
今回は銀魂キャラ増加です。

第二訓：大食い対決は優勝しても金を取る時がある

銀時は一刀も探す事無く、辺りを歩いていた。
理由はアイツも男だ！と言う理由に成っていない理由である。

「オイ！待て！」後ろから男の声が聞こえる。
銀時は後ろを振り返る。

「怪しい奴を見たと言うから来て見れば貴様か？」昔の兵士の様な格好をした男が銀時に言う。
「えっ何？怪しい奴って誰？」
「お前だお前！」男は銀時に指を指す。
銀時は男に腕を掴まれた。

「・・・・何ですか～俺と手を繋いで歩きたいんですか～コノ野郎！」
「それはこっちからお断りだ！！牢にぶち込んでやる」
銀時は兵士に連れられ何処かに言ってしまった。

一刀ｓｉｄｅ
「銀さん何処行ったのかなー、ん？何だあの人だかりは？」
一刀は人だかりに向かうと其処は大食い対決をしていた。
「すみませーん。お替りよろし？」
この台詞を聞いて知らない者はいないだろう。万屋屋の従業員の一人、激辛毒舌の神楽だ。その隣には神楽のペット定春がいる。
「何なんだあの子？つーかアレ犬だよな・・・・どんなに餌あげればあんなに巨大化するんだだよ」
一刀は神楽の食事の量に驚く。

ーーーーーー数分後ーーーーーーーー
もちろんこの大食い対決神楽が大男に勝ったのは言うまでも無い事だ。
「お客さんお勘定の方を・・・」
「ホラよ、これなら文句ネーだろ」
神楽は銀時と同じく小判を渡す。もちろん店主はびっくりだ。

神楽が店を出て歩いているとガラの悪い連中が辺りを取り囲んだ。
「お嬢ちゃん、命が惜しかったらさっきの金をよこしな」
「金玉はアレしかないね」
「女の子がそんな事言ってはいけません！！」
銀時と一緒に居たせいか、思わず突っ込んでしまった一刀。
神楽は一刀の方を向いてニヤリと笑いこう言った。
「私はもう待ってないけど、あのピカ男が残り持ってるネ。」

男達は一刀の方を向いた。
「オイ、兄ちゃん金をだしな」
一刀は瞬く間に取り囲む。
その隙に神楽は定春を呼んで何処かに行った。

神楽は定春の背に乗っている。
「成仏してくれ、勇敢な少年ヨ。」
神楽は手を合わせている。
「待てやコォラァァァァァ！！」
一刀は砂埃を立ててやって来た。
「おお、生きていたのか？」
「当たり前だ！もうちょっとで死にそうだったんだぞ！！」

そう話しながら街の外まで来てしまった。
一刀は全速力で走っていたため息が切れている。
「そういやお前銀ちゃん知らないアルか？」
「銀ちゃん？」
「そう、白髪の天パで死んだ魚の目のような目をした奴アル。」
一刀はそれを聞くとある人物が浮かんだ。
「ああ、銀さんか！」
「お前銀ちゃん知ってるアルか！」
「ああ、さっきまで一緒で街に居たんだけどはぐれちゃって・・・・・」
神楽はそれを聞くと地面に唾を吐く。
「まったく使えない奴アルな」
神楽の態度の急変に戸惑う一刀。
「まっいいや、街に戻るアル」
辺りを見渡すが街の形が見えず何処まで来たのか分からない。
「テッメーーーー街の場所教えろやーーーーー！！大体お前がいつ等に捕まっとけば此処まで来なくて良かったネ。」
そう言って一刀をたこ殴りにする。
「まっ今日はこの辺で勘弁してやるアル」
（あのチンピラより強いかもこの娘）
一刀は数分間生と死の狭間にいたとかいないとか・・・・・。

「それでお前名前は？」
「北郷一刀です。」
「なるほどデューク北郷アルか。私は神楽、この子は定春ネ」
『ワン！』
「あっどうもって俺はゴルゴ13じゃないって言ってるだろ！！」
「まっどっちでもイイネ！それより今から旅をしようと思うネ。お前も荷物持ちとして付いて来るよろし」
神楽のイキナリの発言に一刀は驚く。

「えっどう言う事」
「見たところお前新八より弱いネだから私と旅をするアル。そうすればお前少しは強くなるネ」
神楽は拳を固めてジャブをする。
「・・・・俺の人権は？」
そうして一刀との意思とは逆に神楽の旅に付いて行く事になったのだ。

ｓｉｄｅｏｕｔ

牢屋の中銀時は買い溜めした菓子を食っていた。
「あ～こういう所ってカツ丼出るのかな？」
足音が聞こえる。
「白珪様が合いたいそうだ出て来い！！」
兵士の言うままに牢から出る銀時。
兵士に付いて行くと大広間に出た。
「お前が怪しい奴か？」
赤い髪のポニーテールの少女が聞いてきた。
「そーみてーだな」
「お前！白珪様になんて口の利き方を！」
「いいって、で名前はなんて言うんだ？」
銀時は頭を掻きながら
「人に名前聞く時はまず自分から名乗れって母ちゃんに言われなかったのか？」
「確かにそうだな。あたしは公孫賛字は白珪。この街の城主だ」
「俺は坂田銀時。まー此処で言うンなら姓が坂田名が銀時だ！字は無いンだよな。えーっと・・・・・ハム子？」
「違うわ！！どうしてそうなる！！」
大声で怒鳴る公孫賛。

（あれ？違ったけ？公孫賛・・・・公＝ハ＋ム＝ハム子。合ってるジャン！）
「もーどっちでもイイじゃねーか？」
「良くない！！」
公孫賛は咳払いをし銀時に質問をした。
「お前はどこの出だ？」
「俺は江戸に住んでいたが」
「えど？聞いた事ないな～」
銀時は手を挙げる。
「すみません。コレって何の撮影ですか～レッドクリフのスピンオフでもやんのか～？」
「さつえいって何だ？」
「ちなみに此処って何処？」
「此処は魏と呉に挟まれた位の土地だが。」
銀時は昔の国の名前を聞くと固まった。
（えーーーーーーー！！三国志時代。まさか本当にタイムスリップしちまったのかオイ！）
「ひょっとしてお前天の御使いか？」
「えっ何？初めての御使い？」
「その格好で気にはなっていたんだがコレで納得できた。髪だって銀髪だしな」
銀時は何が何だか分からなくなってきた。

すると兵士がやって来て
「白珪様、劉備と名乗る者が合いたいと来ております。」
「おお、桃香か！いいぞ通せ！！」
それを聞くと兵士は劉備（？）を呼びに行った。
（劉備って行ったよなあのヤロー、もうどう言う事だオイ！）
話は此処で打ち切りになり、天の御使いの話は後回しにされた。
銀時は兵士が持ってきた椅子に座り少し睡眠をとった。

第二訓：大食い対決は優勝しても金を取る時がある（後書き）

三年Ｚ組　銀八先生

「ハイ、皆教科書閉じて、今日もお便りを紹介します。まずは『よっちゃん』さんからのお便りです」

「まず神楽も登場して欲しいと言う事で今回その要望に答えて一刀と旅をさせる事にしました。」

北郷「先生、なぜ神楽さんなんですか？」

「それには理由がありますそれは一刀のブレーキ役です。原作では一刀君はやりたい放題暴れていますが、神楽という存在でそれを防ぐと言う重大な役割を持っているからです。なんせ神楽はそう言う人間対してかなり差別しまうから。」

北郷「そういう意味で・・・・・」

「ハイ、今回の授業はこれでお終い。宿題の感想、要望特に出して欲しい銀魂レギュラーキャラをどしどし送ってください。それと北郷後であんパン５個買ってきなさい」

新八「・・・帰ってアニメ恋姫無双を見て復習しよ」

第三訓：名前は間違えてた時は素直に謝ろう（前書き）

ハタ皇子「なあ、ジイよ余の出番はまだか？」

ジイ「何言ってるンですか？バ・・・バター皇子？」

ハタ皇子「お前、今バカって言いそうになっただろ、しかもバター皇子って何だよ！！」

ジイ「つーか俺等で出番はねーよ」

第三訓：名前は間違えてた時は素直に謝ろう

「白蓮ちゃん久しぶりー」
「おお桃香！久しぶりだなー虚植先生の元を卒業してから三年か元気でなによりだ」
数年ぶりの再会に喜ぶ公孫賛と劉備（？）
「そうだ白蓮ちゃん！私達天の御使いを探してるんだけど噂で聞いた事ない？」
「天の御使いって占いに出てくるあの二人の事か？」
「うん！そうなんだけどこの辺りに流星が落ちたって聞いて白蓮ちゃんなら何かしってるかなって思って来てみたんだ」
「天の御使いらしき男のなら一人あの椅子に座っているのがそうだけど・・・・」
公孫賛が銀時の方に指を指す。

「あの銀髪のお兄ちゃんがそうなのか？」
赤髪の少女が銀時に近付き銀髪を珍しそうに見る。
「桃香気になっていたんだが其処の二人は誰だ？」
公孫賛は劉備の後ろにいる黒髪の少女とさっきの赤髪の少女の事を聞く。

「二人とも一緒に旅をしている仲間だよ」
「我が名は関羽。桃香様の一の家臣。」
黒髪の少女が名を名乗る。
「鈴々は張飛なのだ！」
次に赤髪の少女が元気よく名乗る。

張飛の元気な声に銀時は目を覚ます。
「ふぁ～五月蝿な～如何したんだハム子？」

「だから違うと言ってるだろ坂田！！」
公孫賛は銀時の頭を叩く。
「痛ってーーーーーー！！何しやがんだ！！」
「いい加減私の名前を覚えろ！！」
「いいじゃねーか！俺なんてな昔からのダチに金時って呼ばれるンだぞ！！そんな名前じゃ漫画もアニメもこの小説も終了しちまうじゃねーかーーーーー！！」
「まっ良い次から気を付けろよ」
何だかんだで話が収まる。

「あの～貴方は天の御使いですか？」
「えっさっきからよく聞かれるな～俺が初めてお使いに行ったのはたしかジャンプを買いに行ったようなそうじゃないような・・・・・」
「そうじゃなくて、貴方は天の国から来たのですか？と聞いているんです。」
銀時は納得したように手を叩く。

「そうだよな～ラピュタは何回見ても面白いよな～」
「だから違うって言ってるのです！！」
黒髪の少女は大声で言う。
「つまり私達が聞きたいのは・・・・・」
劉備（？）と名乗る少女は銀時に分かりやすく説明した。
数分後話し終え、銀時は頭を掻く。
「つまり、俺がこの腐った世の中治めるために神様が呼んだ御使いみたいな者だと言うンだな」

「ではお、分かって頂けましたか！？」
「ああ、っと自己紹介がまだだったな。俺の名は坂田銀時。通称万

事屋銀さんだ！」
「よろずや？」
銀時以外の全員が首を傾げる。
「まあ、俺がいた・・・まぁ、お前等が言う天の国で俺は何でも屋をやって暮らしてたンだ」
なるほど、と張飛以外の全員が納得する。

「私は劉備字は元徳」
「我が名は関羽」
「えっ何カンヌ？」
銀時は疑問を言う。
「それは映画祭です！！私はか・ん・う、です！！」
「ああ、関羽ね」
「鈴々は張飛なのだ」
劉備、関羽、張飛は順番に銀時に名乗っていく。

「ふ～ん、劉備に関羽に張飛ね～。・・・・・・ってええええええ！！ウソっマジで！！」
銀時は劉備達の名前を口にして驚く。
（オイ、これヤベーよ！マジヤベーよ！どの位ヤバイかって言うとマジヤバイ！！ってアレ確かこの台詞前に誰かが言ってたような・・・ってそれ何処じゃねーよ！！えっ有名な義兄弟がこんなのアリか！！あの三人つったら誰もが、ものスッゴイごつい顔したオッサンが！っえ
こんなボン！キュ！ボン！な美少女なんてありえねーぞ！もしかして・・・・俺違う世界につまり、三国志を基にしたパラレルワールドに来ちまった事になるのかオイ！！）

「・・・の～・・・・あの～ご主人様？」
「誰がご主人様だって！？」

銀時は呼ばれてるのに気が付き言う。
「銀時様の事です」
関羽は銀時に言う。
「何で俺！？他にも呼び方有るだろ銀さんとか銀ちゃんとか」
「私達のご主人様に成るんだしね」
劉備はなんとも簡潔な答えを出した。
その言葉に関羽も張飛も納得する。

「つーか何！もう俺なんで世直しする事になってんの！！俺の人権は何処にいった！！」
銀時は気力ゼロの何時もの状態である。
「あ～もうめんどくせーよ、何がめんどくせーって、ああもう説明すんのもめんどくせーよ。」
「何処までめんどくさいのですか！！」
（・・・・とっ言っても行く宛てもねーしな）
銀時は其処でまた考え込み口を開く。
「もういいや、俺も行く宛がねーし、俺がその天のおつかい？だっけ？それになってやるよ！！・・・・それと名前は好きに呼んでくれや。」
「じゃあ、私達の事は真名で呼んで？」
「真菜・佳奈なんだそれは？」
銀時の質問に関羽が答える。
「真名とは自分が認めた者にしか呼ばせない名前の事です。私の真名は愛紗です。以後そう呼んで下さいご主人様」
「私の真名は桃香。私の事も気軽に呼んでね」
「鈴々は鈴々なのだ。お兄ちゃんなら真名を呼んでもらっても良いのだ」
銀時は目を閉じ「あんがとよ」と言った。
「坂田！私の真名は白蓮だ」

「良いのか？ハム子？」
「桃香達が真名を許したんだ友達である私も信用してる」
「白蓮だったなよろしくなハム子」
「お前結局最後の最後までその呼び方か・・・・」

銀時は気にせず、スルーする。
「俺には真名なんてねーがよ、あえて言うならさっきの銀時がこの世界で言う真名になるかな
まっ取り合えず宜しくな皆！！」

「「うん」」
「はい」
「おう」
各自返事をする。

「それじゃ、俺のジャンプ代金と愛で地球を救うとしますか」
そうして新たな出会いが物語りが今始まった。
「何ですかそれ？」
「まあ、愛と勇気が友達と言う事さ」

・・・・って言うか、２４時間テレビじゃないんだから

第三訓：名前は間違えてた時は素直に謝ろう（後書き）

おしえて
三年Ｚ組　銀八先生

「は～い、シリーズ化してきたこの質問コーナー兼要望コーナー」

北郷「まだ始まったばかりジャン！」

「ハイ、そこ黙りなさい」

「まずは質問のコーナー。『レオ』さんからの質問。「聞きたいのですが、神楽との旅の途中で他の武将を同行させるのですか？僕はさせないで欲しいです。」ハイ、ではお答えしましょう。」

「旅の途中呉に立ち寄る予定で一刀は呉に残りますが・・・・神楽のキッツーイ一言で原作の一刀が崩壊する予定です。詳しく言えば一刀は暴走しません！！」

「はい次、『黒ゴマ』さんご要望ありがとうございました。その案採用させて頂きます。

「次、新コーナー。オリキャラについてです。銀さんの旧友はヅラと辰馬だけなので新たに銀魂オリキャラを読者の皆様に考えて頂きたいのです。お題はコチラ」

「史実、赤砲隊の相楽歳蔵の下の名前を変えて登場させたいのですがなかなか良い名前が出てきません。良い名前が思い浮かんだらドシドシ送ってください。

北郷「出して欲しい銀魂レギュラーキャラも募集しています」

「今日は此処まで北郷廊下に立ってなさい！」

新八「アニメ見ても分からなかったから帰って三国無双５やろ」

第四訓：旅行先で友人に会うとロクな事はない！！（前書き）

総悟「毎回呼んでくれてありがとうございまさァ」
十四郎「何で今回でてンだ俺達？」
総悟「宣伝ですよ、俺達を登場させろってね。ちなみに皆さんがこの小説を一回読んでくれる度に俺等銀魂キャラに『うんまい棒』を一人三本支給されるシステムになってやすぜ！」
十四郎「ねーよ！！ンなシステム！！」
総悟「そンじゃバイバイ」

第四訓：旅行先で友人に会うとロクな事はない！！

「まー旅に出たは良いがこれから何処に行くつもりなんだ桃香？」
銀時は欠伸をしながら聞く。
「えっとね、まずは近くの村から情報を集めようと思ってね。」
（情報か・・・そういやアイツの情報網はハンパなかったな）
銀時は情報と言う言葉に昔の友の事を思い出した。

小一時間すると街についたが、そこは街と言うよりは誰が見ても地獄の手前と言うのが相応しかった。家は焼かれ人は逃げ惑う。

「どー言う事だよ、この街は・・・・・」
銀時は辺りを見渡し言葉を発した。
「オイ、あんた等！！こんな所居ると殺されるぞ！早く逃げろ！！」
街の住人は銀時達にそう声を掛け逃げて行った。
「どうやら黄巾党のようですね」
「みてーだな」
緩んでいた銀時の目が次第に引きつっていく。

暫くすると黄巾党の姿が見え始め、村人を襲っていく。
それを見た銀時は腰にあった木刀を抜き向かって行く。
「でやぁぁぁぁぁぁ！！」
木刀で一気に五人を吹っ飛ばす。

「お兄ちゃんすごいのだ！！」
「感心してないで我等も闘うぞ！！」
愛紗と鈴々が銀時と共に応戦する。

銀時達の戦いを見て逃げて行く黄巾党はまるで鬼神を見たかの様に

怯えていた。
「ふ～なんとか追い払ったか・・・」
「お見事ですご主人様。」
「すっごいねだって木の刀で敵を倒していっちゃうんだもん」
「最初にあった時と随分雰囲気が違ったしね」
銀時はそれを聞いて少し嬉しそうだが、気絶した奴を見つけて縄で縛った。
「まっコレで動けないだろ？」
そう言い終わると鈴々が着物の袖を引っ張る。
「ねーお兄ちゃん、あそこに変な動物がいるよ。」
「変な動物ったてンなモンいる訳・・・・・・エリザベスぅぅぅぅぅぅ！！」
「あ・妖か！？」
「いや、只の知り合いだ・・・・」
（中身がオッサンとは言いづらい・・・・）

その姿もといエリザベスは銀時に気付くと傍にやって来た。
「ご主人様この妖を知っているのですか？」
「ああ、エリザベスつって俺のダチの相棒だ。こんな格好してるけどな悪い奴じゃねー。で、如何したんだ？」
『銀時さん、桂さんとはぐれました。』
エリザベスは何処からともなくボードを出す。
「あ～ヅラがいんの～へ～・・・・って今お前何て言った？」
『桂さんとさっきまでいたけど此処に来るまでにはぐれました』
銀時はエリザベスを揺さぶる。

「オイ！まさかさっきって数分前か？」
エリザベスは頷く。
「しゃ～ね～けどついでにヅラも探すか？」
「その必要は無いぞ銀時」

屋根の上から誰かが飛び降りて来た。
・・・・・ヅラだった。
「お前・・・何時からいた？」
「お前等がエリザベスと話し始めてだ、どうも出にくくてな時をみて今姿を現したと言う事だ。」

「ばっか！そう言うのは早めがいいんだよ！！」
銀時は桂に向かって取り合えず蹴る。桂はそれを避けられずダイレクトに受けた。
「ご主人様、この方も知り合いなのですか？」
「ああ、元友達のヅラだ。」
その言葉に桂はすかさず起き上がり
「ヅラじゃない桂だ！！銀時お前俺の初登場のサブタイトル忘れたか！」
「『ジジイになってもアダ名で呼べる友達をつくれ』だろ主人公なんだしそれくらい覚えてるっつのだからヅラってアダ名で呼んでるジャン」
銀時を桂は訳の分からない口論を続けた。それが終わり桂は桃香達の方を向き。

「俺は桂小太郎と申す。いわゆる革命家をやっている」
「な～にが革命家だテロリストの癖によ」
「元テロリストだ！！今は争いの少ない国の変え方を行っているのだ。そう言うな」
「そうなんだ、私は劉備真名は桃香。」
「と、桃香様出会ったばかりの者に真名を言うのは・・・・」
「だって桂さんはご主人様の友達でしょそれに悪い人じゃなさそうだし、ね」
桃香の言葉に愛紗は少し考え
「はあ、我が名は関羽。桃香様とご主人様に使える一の家臣！！真

名は愛紗だ」
「鈴々は張飛なのだ。でもヅラのお兄ちゃんなら鈴々って呼んでもいいのだ」
「真名？つまり真の名、自分を認めた者にしか呼ばせない名のことか！！」
「つーかヅラお前何でンな事知ってんだ？」
銀時が桂に疑問を言う。
「お前は子供の頃寝ていたから知らないだろうが、松陽先生が教えて下さっていたではないか」
「そーだっけ？」
「これだからお前は学習能力が低すぎるのだ」
「悪かったな！ヅ～ラ！！」
「ヅラじゃない！！桂だ！！」

鈴々がエリザベスの方を向くと直に銀時と桂を呼んだ。
「お兄ちゃん、あの人消えそうだよ」
「何だと！！」
二人が振り向くとエリザベスは半透明になっていた。
「どう言う事だエリザベス。死ぬなまだ死ぬには早いぞ！！お前には俺と国を変える大仕事がまだ残ってるではないか！！」
『桂さん私は死ぬわけではありません、今此処に居るのは私の意識だけです。私はひとまず先に江戸に戻ります。私を呼びたいときは名前を呼んでください。』
「何を言ってるか分からぬぞ！！エリザベス！！」
桂は涙を流し言う。
『桂さん、銀時さんと一緒にこの外史で頑張って下さい』
そう言うとエリザベスは消えていった。

「ねーご主人様あの人何だったの？」
「さー？」

「何かさっぱり分からなかったのだ」
（まっ中身は監修のオッサンだから何か企んでいるのは違いねーだろーけど）
「如何するんですか？ご主人様？」
「ほっとこーぜ」
こうして４人は何も無かったかの様に村人が集まっている場所を目指して歩いて行った。
桂は立ち上がり
「銀時、暫く共に行動をさせて・・・・・・オ～イ待ってくれ銀時！！」
取り合えず桂もなんやかんやで銀時達に付いていった。

第四訓：旅行先で友人に会うとロクな事はない！！（後書き）

教えて　三年Ｚ組　銀八先生

「ハ～イ、久々に更新されたこの小説。今回微妙～だったな、ギャグ少な目シリアス少しの要領だったな。ま～いつもギャグを入れる訳にもいきません。銀さんも決める時はカッコよく決める男ですからね。っとそう言う事で質問のコーナー。」

「まずは『ライム』さんからの質問。『銀さんはハーレムになるのですか？』・・・・この質問ズバリお答えしましょう。銀さんは元々がカッコいいのですが普段はあんな目ですなのでモテル事はあまり無いでしょう。ま～黄忠・厳顔・黄蓋や孫策微ハーレムならあると思います。」

北郷「その他の武将は？」

「まぁ、憧れ尊敬程度でしょうね。普段がプータローだしな」

「要望では平和ボケの高杉とか出ていますね～。コレって別の外史の高杉って考えていいの？」

北郷「良いんじゃないですか？」

「お前に答えは聞いていない、取り合えず廊下に立ってろ！！」

「ハイ、今日は此処まで！」

新八「そろそろ、出番が欲しいな」

第五訓：時には冷静でいる事も大切だ（前書き）

新八「最近出番ないな～」
屁怒呂「そう言えば最近坂田サンと神楽サンを見ませんな～」
新八「へ・へ・屁怒呂さん！！如何したんですか！？」
屁怒呂「いや、心配だったので。それでは皆さんまた次回」

第五訓：時には冷静でいる事も大切だ

銀時達は街の住民を探して辺りを歩いている。
先頭に桃香と鈴々少し後ろに愛紗、そして４メートル離れた位の所で銀時と桂が歩いている。

「桃香様、鈴々！我等は遊びに来ているのでは無いのだぞ！！」
そう言って愛紗が二人を注意する。その間に桂は桃香達に聞こえない様に銀時に声を掛けた。
「銀時少し聞いていいか？」
「なんだ？」
銀時は鼻をほじりながら桂の方を向く。
「あの少女等が名乗った名前、劉備・関羽・張飛と言っておったな。アレはどういう事だ？」
「ヅラやっぱり気付いてたか、俺が言う事は全部事実だ。聞いてくれるか？」
銀時は真剣な顔で言う。
「ああ、」
「どうやら俺達は三国無双の時代にタイムスリップしちまったみてーなんだ。しかもただタイムスリップしただけじゃねー。お前も知ってる様に武将の性別が女なんだお前に会う前に公孫賛っつ～武将に会ったんだがそいつも女だったて訳だ。他にも黄巾党って～のも居るらしいしな」

桂は少し考え銀時に言う。
「つまり、お前が言いたい事は此処は三国志を基にした異世界と言いたいのか？」
「ああ、そう言うことだ。でもお前良く名前聞いて驚かなかったな～オイ」

「俺も正直名前を聞いた時は自分の耳を疑ったし心中驚いた。だが侍というもの何時如何なる時も冷静さを保たねばならぬ」
桂の言葉に銀時は少しついていけない。

「へいへい、そりゃ～ご苦労なこって、でお前はこれからどーすンだヅラ？」
「帰る方法も分からん以上、一人で居ても仕方ない銀時暫く共に行動させて貰うぞ！」
その言葉を聞いて銀時は一瞬嫌な顔をした。

「ご主人様遅いよ～」
「早く来るのだお兄ちゃん」
桃香と鈴々が呼ぶ。
「ご主人様？お兄ちゃん？銀時まさか・・・お前がその様な趣味をしていたとは・・・・・」
「ちっげーーーーよ！！俺にンな趣味はねぇぇぇぇ！！あの三人が勝手に呼んでんだけだっつーの！！」
銀時は桂の誤解を大声で文句を言う。

「ンでどうしたんだ？愛紗」
「はい、向こうに人が集まっているようです」
「向こう・・・って良く見えんな～俺はうっすらとしかみ見えねーぞ」
「確かに・・・言ってみん事には状況は分からん」
銀時達は向こうにうっすらと見える人影を目指して歩き出した。

目的地に着き其処には怪我をした村人が大勢いた。店の中にも幼い子供や老人がいた。
「これは、酷い」

「オイオイ、此処は地獄の一丁目か？」
銀時と桂が見た光景それは数年前自分達が感じたモノと似ていた。
・・・・・悲劇。その一言だけが頭に浮かんだ。
銀時達に気付いた村人達が視線を向ける。
「あんた達は？」
「我等はこの戦乱を憂い黄巾党を倒すべく立ち上がった者だ。」
その言葉に村人が反応する。
「官軍が助けに来たのか！？」
「残念だけど官軍じゃないよ」
桃香の言葉を聞くと村人達の瞳はまた光を失う。
「でも、皆を助けたいってのはホントだよ」
「あんた等５人で何ができるって言うんだ、俺達でも敵わなかったんだぞ！！」
銀時はその言葉を聞き言い返す
「敵わなかった？テメー等ただ自分だけ生き残るのに必死で逃げてたじゃねーか。そう言う事言うンのはな諦めず目の前の事立ち向かってから言えや」
「ご・ご主人様！！それは言いすぎでは・・・・」
「あんたに何が分かるんだよ！平和なツラしやがって！！」
村人の一人が銀時の胸倉を掴む。
「俺は別に命捨てて闘えってつってンじゃねー。自分の・・・テメー等の大事なモン守りながら逃げたらお前等にしちゃ上出来だった。それをする奴は俺の見た所じゃ一人しか居なかったぜ！！」
銀時はある少年を見る。
「アイツはあんなに小せー体してンのによ母ちゃん背負って弟の手ぇ繋いで守るモノの為に逃げたんだ。俺はこの中じゃテメー等よりずっと強えーと思った。」

「・・・・・・・」
辺りは静まる。
「テメー等にまだ守りてーモン守ろうつー想いがあンなら俺たちゃー手を貸すぜ。それに見てみろよ其処にいるガキ達さっき仇討つとか言ってた奴も居ただろ？そいつ等は現実受け止めて前に進もうとしている。まだガキなのにお前等ァ大人がその綺麗な手ェ汚させるつもりか？俺はやだね・・・俺は命が消える事になったとしても俺はそれで守りてーモン守れりゃー俺は闘う事ができる。」
銀時は子供達を見た後大人達の方を向く。
「「ご主人様・・・・」」
「お兄ちゃん」
「銀時・・・・」
「俺ァもう俺の目の前で人が殺されていくのはまっぴら御免だ。あんた等には俺みたいになって欲しかァねーンだよ」
銀時は昔の自分と今の村人達を少し重ねたのかもしれない。

「テメー等この街を守りてーか？」
「ああ、でも勝ち目なんてあるのか？」
「心配ない我等には天がついているからだ」
愛紗は凛とした声で言う。
「そうそう、鈴々達にはすっごい強いお兄ちゃん達がついているんだよ」
「まるで、神様が助けてくれるみたいだな」
「この街も噂くらい聞いた事はあるだろう？天の御使いの噂を」
その話を聞くと村人達は騒ぎ出す。
「あの二人の御使いの？」
「この人がそうだよ」
桃香はそう言うと同時に銀時の傍に来る。
「この兄ちゃんが？まあ、確かにそう言えばそう見えるな」
「この方は木の刀で敵を数十人も倒せる武をもっておられる」

「今はこんな目つきだけど戦っている時はカッコいいのだ」
「コイツの強さなら友である俺が保障する」
それを聞くと村人達は立ち上がる。
「もしかして、助かるのか？俺達」
「俺は目が覚めたぜ！どうせ殺されるなら守るもの守って死んでやる」
「俺も闘うぜ！！」
村人達は黄巾党と闘う決心をして、武器を倉庫に取りに行った。

村人が銀時の元に来て銀時に聞いた。
「なあ、どうしてアンタ見ず知らずの俺達と闘ってくれるんだよ？」
銀時は溜息をした後
「侍が動くのに理由なんざいらねぇさ其処に守りてーモンがあるなら剣を抜きゃーいい。・・・・それが俺の武士道だ」
「武士道？」
その場にいた桂以外が首を傾げる。
「あんた等にもその内分かるさ。・・・・・さてとっ手伝いに行ってくるかヅラお前も手伝え」
「ヅラじゃない桂だ」
銀時は先に歩いて行く。
「不思議な人だね」
「まぁ、それがアイツの良い所でもあるけどな」
桂は桃香達にそう言うと銀時の後を追った。

第五訓：時には冷静でいる事も大切だ（後書き）

三年Ｚ組　　教えて銀八先生

「う～い、早速お便り紹介～。『ブービー』さんおっ初めてのお便りで～す。内容は・・・・幽霊ネタですか・・・・・回答は考えさせて下さい」

「あっそれと『黒ゴマ』さんいつもありがとうございます。・・・・とまあ、今日は短めに此処まで北郷後で職員室に来るように」

北郷「えっ！！」

第六訓：修行は師匠同伴で修行をしましょう。（前書き）

辰馬「わはははは、更新遅れちまったぜよ」
陸奥「お前が笑うな！！」

第六訓：修行は師匠同伴で修行をしましょう。

銀時達が歩いていると倉庫の辺りに人が集まっていた。
「如何したンだ？」
「武器庫の扉が錆びて開かなくなってんだ」
「どれどれ」
銀時は後ろに下がり助走をつける。
「前にいる野郎共そこ退けえぇぇぇぇ！！とおぉぉぉぉりゃあぁぁぁぁああああ！！」
銀時は扉に向かって蹴りを入れた。
扉は壊れ何とか武器が皆に回った。
「あ～あ、扉修理しなくきゃいけないな」
「良いじゃねーか、生きて帰って来て直しゃー良い。生きる理由小さいが今出来たじゃねーか
帰ってきたら前のより立派なのにすりゃーいい、そん時は俺等も手伝うぜな、ヅラ」
「ヅラじゃない桂だ。と言うよりも銀時勝手に俺も参加させるな」
そうぼやきながら二人はまた村人達を手伝いに行った。

一刀ｓａｉｄｅ
「ほちゃぁぁぁぁああああ！！」
辺りに木が倒れる音が響く。
「さあ、先ずは軽くこの木から倒していくネ」
「無理だろ！！絶対！！」
大木を軽く足で倒した神楽に一刀は突っ込む。
「銀ちゃんだってこの位木刀で折るネ。それにこんなに細い木くらいお前もやれば出来るアル。よくテレビでも言ってるネ『やればできる！○○○○中学講座』ってだから今すぐコレ倒すネじゃないと

今日の晩御飯は抜きヨ」
神楽は酢昆布を加えそう言う。
「一日ではどう考えても不可能だろ！精神と時の部屋じゃないンだからさ。それ位考えろこの酢昆布娘！！」
「今のお前が言う事は全て現実から逃げようとしている言い訳ネ。普段なら蹴り入れるとこだがお前に酢昆布娘と言われても屁でもねぇよ」
「あれ、何かキャラ変わってない神楽？」
「お前に名前で呼ばれたくないネ。私の事はかぶき町の女王様と呼ぶヨロシ」
「ドンだけ上から目線なんだよ！！」
「それが嫌ならアイツに稽古をつけてもらえヨ」
神楽が指差した先には何故か何処かのクマとインストラクター達がいた。
「何じゃありゃ～～！！何処から呼んで来たオイ！！」
その言葉を神楽は無視して定春と遊んでいる。

一人のインストラクターが一刀の肩に手を置く。
「大丈夫？私達がいれば貴方は今より強くなれます。」
「な・何を根拠に言ってるんですか？」
「何故か？それは・・・・私達大人は貴方達子供の人生のインストラクターなのだから」
その言葉を聞いて一刀はきょとんとする。
「じゃあ、あのクマは何ですか？」
「あれは君のお手本役をやってくれマス」
「どう言うお手本ですか！？何を手伝ってくれるンですか！？しかも普通の熊じゃなくて幼児向けのクマなんですか！？」
「詳しくはその内話しマス」
「今話せよ！！」
と・まあ、こんな感じで一刀は後漢末期トリップ一日目で修行を始

める事になった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

銀時達は黄巾党との戦いに備え準備、桂と鈴々は辺りの地形を探りに出ている。

「よし、街の連中の準備は大分できたようだな」

「うん、皆ご主人様のお陰で勇気がでた様だし、大活躍だね」

「この様子だと明日の明日に出陣できますね」

その後桂達が戻ってきて街の住民達に明日の行動を確認し今日は早めに切り上げ明朝を待つだけとなった。

夜、銀時は店の屋根に上って月を見ていた。空は曇り一つ無く辺りは猫の無く音しか聞こえない。

「良いのか銀時」

「ヅラ」

銀時が振り返ると其処には桂の姿があった。

「ヅラじゃない桂だ。それよりもお主良いのか？お前は戦はしたくないのではないのか？」

昔、攘夷戦争の事を口にする桂。

「それはそれで嫌だけどよ。桂俺は昔と重ねてるのかもしれねぇー。黄巾党が天人でこの街の奴等が俺達侍ってよ・・・」

「銀時・・・・」

「あン時は大事なモン色々と零しちまったからよ。俺達と同じ思いをさせたくないンだ」

「そうか、お前がそう言うのだったら俺はもう口を出さん。」

桂は立ち銀時に背を向け言う。

「オイ！ヅラ」

「何だ？」

「俺の昔の事、桃香達には言わねーでくれるか」

「・・・・・分かった。」
「あっそれとヅラ」
「今度は何だ！？」
「其処足場ねーぞ」
銀時は桂の足元を指す。桂の片足は足場が無かった。
「えっ！？うわぁぁぁあああ！！」
もちろんこの後バランスを崩し桂が屋根から落ちたのは言うまでもない。

明朝、出陣の挨拶をすることになった銀時はまだ眠たそうな顔をして皆の前に現れた。
「ふあ～眠い～。あ～やっぱり俺朝ダメだわ」
「ご主人様、挨拶をお願いします」
「ハイハイ、分かった分かった。・・・・俺が挨拶するより全国の工場長の方が挨拶うまいって・・・・・」
銀時はぼやきながら村人の前に出る。
「良いか、お前等これから俺達はテメーの命賭けて戦いに行く訳だが、テメー等の魂・・・もとい心の力でお前等は賊のヤロー共より強くなれる！俺は俺の守りてーモン守る。テメー等はテメー等の守りたいモン守りゃーいい。その気持ちが強ければ俺たちゃー何でも勝てる！！だから頑張って帰って来ようじゃねーか！！・・・・・・以上朝礼終わり！！」
銀時はそう言うと背を向けて桃香達の方へ戻って行った。

それが終わると桃香以外は前線へ出ていった。
そうして日の出と共に戦が始まった。
先ずは銀時が木刀で敵を蹴散らし、その後に桂が真剣を使って切り捨てていく。

あらかた敵が片付くと今度は愛紗と鈴々達の隊が、左右から攻めて、見事大勝利となった。

「ふ～終わった。終わった。」

銀時達が桃香の元に戻ると。村人達が銀時に近付いて来た。

「アンタに突然で悪いけど、この街の県令になってくれないか？」

「県令なにそれ？」

「今で言う知事の様な者だ」

桂が小声で言う。

「え～めんどくせーよ。俺絶対出来ないって、無理無理、俺夏休みの宿題最後にやる派だから」

「頼むよ、アンタだからこそ頼んでるんだ」

銀時はかなり嫌だったが桃香達の説得により県令となったのだ。（笑）

「（笑）っじゃねーーーーー！！それで済ますな」

とまあ、銀時達は新たなスタートラインに立ったのだ。

??ｓａｉｄｅ

黄巾党のとある場所。

「バカ野郎ーーーーー！！お前等そんなんで『数え役萬☆姉妹』の親衛隊かーーーーーー！！お前等には親衛の何たるかこの僕志村新八が講師としてお前等に教えてくれるわーーーーーーーーーー！！」

何故か其処には新八の姿があったとか・・・・・。

第六訓：修行は師匠同伴で修行をしましょう。（後書き）

教えて
三年Ｚ組　銀八先生

「は～い、ほぼ一週間ぶりの更新で～す。」
北郷「如何して遅れたんですか？」
「作者にだって色々あるンだよ。テストとか、勉強しなくちゃいけねーだろ。良い点数取りたい訳じゃない赤点取りたくないから勉強してるンだ。お前も学生ならそこを察しろ！」

「はい、質問『ＧＩＰＰＯ』さんからのお便り。微ハーレムの中に孔明を入れて下さい。ではお答えしましょう。その案採用させていただきます。」
「次、『華ロさん』からのお便り、愛紗達は銀さんを好きにならないのですか？お答えしましょう。・・・・なりません。好きになると言ってもＬＯＶＥではなくｌｉｋｅの方になると思います。」

「本日は此処まで！北郷後でバカ校長の触覚取ってこい！！」

第七訓：ジブリ作品って何か感動するよね（前書き）

「今回はなんかグダグダです」

第七訓：ジブリ作品って何か感動するよね

銀時が県令になって早二週間が経つ。
桂は色々文句等を言いそうなので銀時が「お前は中華ソバ屋でも開いとけ」と言った。
銀時はまさか本当に桂が蕎麦屋をやるとは思わなかった。
その銀時と言えば・・・・・

眼鏡にスリッパと白衣にレロレロキャンディーまさに銀八先生だ。
理由は銀時の着物は何時も四着持っているが着替えがないと言う事で仕立て屋に頼んで着物が出来るまでの間この格好と言う訳だ。
別名この格好の時の銀時と銀時政務モードと言う。（仕事してないけど・・・・）
しかも城の中庭に万事屋を作るしやる事はめちゃくちゃだ。

「あ～あ、今日も昨日も一昨日も仕事仕事やンなっちゃうよ～。だから俺、知事引き受けるの嫌だったのによ～」
書類に向きながら愚痴を言う銀八もとい銀時。
「もうテキトーに書いてしまおうか。糖分不足でイライラするしよぉ」
「何を言ってるのですかご主人様！」
早速愛紗注意される。
「だってよ～全然書類減ってる様に見えねーンだぜ。」
「そ～だよね～何だか手首が痛くなってきちゃった」
「桃香様まで・・・」
「とっ言う訳で俺は・・・・」
書類を書く仕草を見せる。
「やっと御自覚を」
「逃げるぜぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

全速力でドアを蹴り場内を走り去る。
「ちょっとご主人様！！」
愛紗も追いかけたが銀時の常人ならぬ脚力に追いつく事は出来なかった。

「しっかし、飛び出して来たはいいが、これから如何すっかなー」
銀時が歩いていると桂の店があった。その名は『喫茶☆桂』と看板に書かれている。
何故喫茶になっているのかと言うと「何か喫茶って名前何か儲かりそう」と言う訳の分からない理由で決めたらしい。
ちなみに☆なノリで入れたらしい。

「ん？銀時か如何した？っと聞くまでもないか。どうせお前の事だ政務が嫌になって大方愛紗殿から逃げて来たのだろう。」
「つーかヅラ何でお前ウエイトレスの格好してんだ？」
「バカ者！！蕎麦屋と言ったらこの服装だろう！」
「バカだろ！お前バカだろ！！そもそも店の名前からして蕎麦屋じゃねーンだよ！！」
「あー！お兄ちゃん。お兄ちゃん如何したのお仕事じゃないの？」
店にいる鈴々が銀時に気付くと傍に来た。
「仕事してたンだが、逃げて来た。」
「また逃げて来たんだ。でも後で愛紗に怒られるのだ」
「そン時は聞いてるフリして目開けたまま寝るさ」
伊達眼鏡を外しながら銀時が言う。

話しているとガラの悪い連中３人が入って来て、人の酒を取るなど店を荒している。
銀時がそいつ等に向かおうとすると桂が銀時の肩を押さえる。
「銀時ここは俺に任せろ」
銀時は男達の方へ歩いて行き言う

「お帰りなさいませ、旦那様」
「「「イヤ、違うから俺達」」」
「料理はAコースとBコースとありますがどちらにしましょうか？」
「どっちでもイイから何でも持って来い！」
「かしこまりました。」
そう言うとヅラは料理を作り始めた。

「お待たせしました。炒飯です。」
「「「何で炒飯！！」」」
そうツッコミながらも三人は食べ始まる。
食べ初めて直に彼等に異変が起きた。
「は、腹が・・・・・」
そう桂は三人の料理に下剤を入れていたのだった。
男達は店のトイレに入ろうとノックをする。
「入ってま～す」
中から桂が言う。
三人は店から出て行った。

「たっ大変です！！銀時様・張飛様！桂様！」
兵士が銀時達の元へやって来る。
「黄巾党がこの街に進軍中、公孫賛殿がそれに応戦している模様！至急城にお戻り下さいとの関羽様からの報告です。」
「ああ、分かった。鈴々行くぞ！ヅラお前も後で来いよ」
「ああ、承知した。」
銀時と鈴々は城に戻り軍議が始まり、直に出陣する事になった。

銀時は何時もの服に着替え木刀を腰に差す。
「やっぱり俺は馬より源チャリの方がいいな～」
とぼやきながら部屋を出た。
途中で店を閉めた桂と合流し黄巾党と闘う為出陣したのだった。

第七訓：ジブリ作品って何か感動するよね（後書き）

教えて
三年Ｚ組　銀八先生

「今回はまぁ、銀さんの三国時代の日常がメインでした。ここで少しガックリきてるそこの君！安心しなさい。次回は軍師二人と水色のあの人とアホが登場します！多分次回はいつもより長いと思います。」

「はい、質問コーナー。『ブービー』さんから感想。
やっとし、、、し、、、名前なんだっけ。ま、良いや。ついにツッコミしか能のない地味ダメガネ君出てきましたね。更新これからも楽しみにしています。」

「・・・・駄目ですよ～『ブービー』さん。本人に怒られますよ。ちなみにこの世界ではアイツは一刀よりも強いです。と言うよりも一刀はアイツには勝てません。むしろアイツでも楽勝です。」

北郷「俺って一体？」

沖田「まあ、コレが真実ですぜィ」

近藤「まあ、諦めず頑張ろう」

「ハイ、今日は此処まで北郷後でジャンプ買って来い」

第八訓：文化祭で出し物を考えるのは大抵文化祭実行委員（前書き）

緊急報告！！

皆さんご存知の作者『新ポポス三世』が新たな恋姫を描く。

現れたのはあるごく普通の一家。
その名は野原一家。
主人公野原しんのすけ。
歴史も外史の変える、おバカ参上。
猛将達との闘いの幕が開く。
バン！！
『真・恋姫無双～嵐を呼ぶ五歳の少年とその一家～』

２００９年８月連載開始！！

「見れば～～」

新八「だから嘘で釣るの止めろって何度も言ってるでしょーーーーー！！」

銀時「何時も言うけど嘘から出た誠ちゃ～んなんてよくある話だろ？」

神楽「そうそう、そして映画に出てきたゲストキャラも登場とか宣伝してたら読者全員騙せるアル。」

新八「だから騙してどーすンだよ。」

銀時「と言う訳で新連載楽しみにしているよーに」

ビシィ！！

新八「だからやんないからね！！騙されちゃダメだかンね！！」

第八訓：文化祭で出し物を考えるのは大抵文化祭実行委員

銀時達が出陣してから半日がすぎた頃、白蓮の本陣についた。
「よお、桃香・銀時」
「うっすハム子」
「二週間ぶりだね白蓮ちゃん、くいとめてくれてありがとう。」
桃香は白蓮にお礼を言う。

「なぁに、友達なんだしそんな事言うなよ。で、気になっていたんだが、その長髪の男は誰なんだ？」
白蓮は桂を指差す。
「自己紹介が遅れた公孫賛殿、俺は桂小太郎と申す。今はラップで攘夷の布教活動をしている」
初対面である桂は公孫賛に挨拶をする。
「お前まだンな変なラップやってンのかよ！」
「変なラップじゃない、カツラップだＹＯ！！」
桂は決めポーズをしながら言う。
「何？ちょっとコイツ、ちょっと誰かコイツ殴ってくンない！！」
銀時は桂の姿を見て、嫌な気分になった。

「現在の状況は？」
「今、黄巾党は撤退してるが、多分半日後には進軍してくるだろう」
「して、数はどの位なのですか？白蓮殿」
愛紗が白蓮にたずねる。
「大方二万ってとこだな、こっちは六千でそっちは？」
「え～っと、どン位だっけヅラ？」
「えっ、イヤ俺も知らん。知っているか桃香殿？」
「え～っとね、５千くらいかな？鈴々ちゃん？」
「鈴々はさっぱり知らないのだ。」

自軍の兵の数をまともに知るものがいない。
（本当にこの先大丈夫なのだろうか・・・・・この方々は・・・・・）
愛紗はこれからの事を考えると何だか目眩がしてきた。
「こちらの軍の数は約五千五百です。」
「お～、さっすが愛紗ちゃん」
「記憶力抜群だなオイ」
「これだけ記憶力いい愛紗を怒らせると、ず～と根に持たれるのだ」
銀時達は愛紗に感心する。が・・・・鈴々は・・・・・・・
「何か言ったか？鈴～々」
「何でもないのだ。」
鈴々に聞く愛紗の後ろには黒いオーラが漂っていたとかいないとか、

「伝令！西に黄巾党三千五百、東に五千が進軍中です！！西側にはまだ逃げ切っていない村人が四名いる模様」
伝令が息切れながら銀時達に報告する。
「よし、桃香は白蓮と一緒にいろ、愛紗と鈴々とヅラは俺と西に向かうぞ。」
こうして馬を全速力で走らせ、途中愛紗と桂は兵を指揮するため別れ、銀時と鈴々で村人を助けに向かった。

？？ｓｉｄｅ
「はわわ、お婆さんもうちょっとですから頑張ってください。」
「あわわ、朱里ちゃん、黄巾党がすぐそこまで・・・どうしよう」
そこにいたのは老人と少女二人と一人・・・・・
「此処は俺に任せるぜよ」
男は懐からこの時代には無い銃を取り出し、引き金を引く。
パッアアアァァンンン
銃声がしたが銃口から出てきたのは弾丸は無く、『ふんばれ』と書

かれた旗が出てきた。
「『ふんばれ』か・・・コレはまたまた一本取られたのォ、アハハハハ」
「何のん気に笑っていやがんだコノヤロー！！」
敵軍の反対方向から砂埃を立ててやって来た男の人は黒い眼鏡の人を蹴り飛ばしたのでした。
「はわわ！！」
「あわわ！！」
黒い眼鏡を掛けた人を蹴ったその人は銀色の髪をした男の人は荒れている様に見えたけど、その人の目はあまりに真っ直ぐな目をした人でした。
「ひょっとしたら、雛里ちゃん。」
「うん、朱里ちゃん」
この人が私達が探していた人物だと確信しました。

ｓｉｄｅｏｕｔ
老人と少女二人と一緒にいた人物、それはかつての戦友、坂本辰馬だった。
「いたたたたた、なんじゃおんしゃあ、行き成り蹴り掛かって来て・・・・ん？よく見たら金時じゃあ、ないか？」
「いいか、俺は金時じゃなくて、ぎ・ん・と・き、だ！！いい加減覚えろアホ辰馬。」
足蹴りしながら銀時は辰馬に言う。
「あ、あの」
「ン？何だ？」
銀時が声を掛けられ振り向くと辰馬と一緒にいた少女がいた。
「あ、あの、頑張りましゅ！！」
「あわわ、私も頑張ります。」
「だから何ｗ「お兄ちゃーーーーーーん！」」
後ろから凄い速さで近付いてくる鈴々は止まることが出来ず銀時に

ダイレクトアタックしたのだ。
「ぎゃあああああああ！！」
地面に頭をぶつけ痛がるしかも、運悪く銀時が倒れた部分に岩があり、それが頭に直撃したのだった。
「いたたたたた！！ねぇ、ちょっと血ィ出てない？血ィでてない？」
「「思いっきり血が出てるんですけど・・・・・大丈夫ですか？」」
少女二人が銀時の心配をする。
「お兄ちゃん、ごめんなのだ。それでそこにいる子供達が逃げ遅れた人たちなのか？」
「ああ、一人は俺のダチなんだけどな」
何処から取り出したか分からないが銀時の顔には包帯が巻かれていた。
「私達は子供じゃありません、もう大人なんです。」
「ふん、鈴々だってもう大人なのだ。」
「ハイハイ、分かった分かった。で何は用があンだろ？その二人は」
銀時は先ほどの事が気になり二人に尋ねる。
「あ、あの貴方は天の御使い様ですか？」
「何だ君はってか、そうです私が天の御使い。坂田銀時人呼んで万事屋銀さんだ。」
「あの、お願いがあるんです。」
帽子を深く被った少女が恥ずかし気に言う。
「「私達を仲間にして下さい！！」」
「ちょっと待て、行き成りで悪いンだがまず名前教えてくれるか？」
「はい、私は諸葛亮字は孔明です。」
「私は・・・鳳統字は士元です。」
「えええええええ！！諸葛亮！！鳳統！！マジで！！軍師か？軍師希望か？」
「は、はい」
銀時はあまりにも予想外の出会いに驚く。まさか助けた二人が有名

な蜀の軍師だったのだから。
「とっ、はしゃぎ過ぎたが取り合えず訳を聞こうと思ったが・・・・どうやら敵さんは待っててくれるほどカルシウムが足りネーらしい。鈴々準備はいいか？」
「もちろんなのだ」
銀時は老人と二人を後ろに下げる。
「あ、あの」
諸葛亮が銀時に話かける。
「ン？大丈夫だよ、此処から先は敵一人はおろか矢の一本通しゃしねーよ」
銀時は桂から借りた刀で敵に向かう。
銀時はこの時代ではありえない攻撃を使って敵を倒して行く。
後ろを狙って襲い掛かって来る敵もいたが銀時が体を反転させて蹴りで倒して行く。
「あわわ、す、凄い銀時さん」
「あんな数相手に引けを取ってない」
「アイツは銀時は守るモノがある時一番力を発揮するんじゃ」
さっきまで気絶していた辰馬が二人に語る。
暫く闘っていると、愛紗達の援軍が来て敵を倒すことが出来た。

銀時は返り血を浴びておらず、何時もの目つきに戻っていた。
老人は先に保護し兵が安全な場所に送っていった。
「さて、此処はまだ危険だし、取り合えず本陣で話聞こうか？」
「「ハイ」」
二人は返事をし、銀時達に付いていった。
辰馬はと言うと・・・・・銀時に頭を掴まれながら引きずられて行ったとか。

??side

「麗羽様の人使い荒いよね～」
「文ちゃん仕方ないよ、姫は昔からああなんだし」
「顔良将軍袁召様の書類に間違いがありましたので訂正をお願いします。」
「もういやーーーーーーーーー！！」
「どれだ貸してみろ。」
同じ部屋で政務をしていた男が書類を見る。
男は筆を取り書き始める。
その瞬間彼の周りは突風が吹き荒れ凄いことになっている。

数分後。男は書類を訂正し終え、この時代にはないタバコを吸う。
「直に提出してきな」
「は、はい」

その男こそ、真選組に問題児を上にも下にも持つ、彼にフォローできないモノはない。
その名を、フォロ方十四フォロー。
・・・・もとい真選組副長、土方十四郎だった。

第八訓：文化祭で出し物を考えるのは大抵文化祭実行委員（後書き）

教えて
三年Ｚ組　銀八先生答えてのコーナー。
「まずは『神楽』さんの質問。華雄達は仲間になるのですか？恋や華雄を微ハーレムに入れて下さい。」

北郷「ではお答えしましょう。」

「お前が言うな！！。ハイ、もちろん仲間になりますよ～。銀さん余り殺生好きではありませんからね。って言うか華雄って真名あったけ？」

一同「・・・・あっ！！」

「と言う事で『神楽』さんは華雄登場までに真名を考えて送るよーに」

「次、『ブービー』さんからの質問。源外のジーさんを登場させて下さい。ズバリお答えしましょう。」

「源外のジーさんは董卓との出会いつまり洛陽で合流する事を予定しています。」

「本日は此処まで、関係無いけどクラス全員廊下に立ってろ！」

「へーい、次はキングコングのお二人～よろしく～・・・・・へ～い次はキングコングのお二人よろしく～・・・・・・あれ？」

志村「先生」

「何？」

志村「コレ小説ですから、テレビじゃないです。」

「ああ、そう」

第九訓：団体行動はきちんと守りましょう。（前書き）

１００００アクセス突破！！
真・恋姫無双アニメ化記念！
《作者代理銀八先生》「ハイ、読者の皆様にだい～じなお知らせがあります。ご覧の通り、上記の事を記念として、今年ＯＶＡ化されたアニメ恋姫無双を小説を短編で書こうと思います。もちろん銀魂キャラ・・・もとい、銀八先生キャラが参加します。」
《作者代理銀八先生》「そこで、少し見所を説明します。生徒会長を賭けて愛紗達がスポーツをします。が、俺等はずっとその間麻雀してます。以上お楽しみに」

掲載は７月下旬～８月上旬。

第九訓：団体行動はきちんと守りましょう。

「ご主人様おかえり～」
「ご無事で何よりです。」
「でっ誰だソイツ？」
先に本陣に帰っていた愛紗達と合流する。
「ああ、ただいま。コイツは坂本辰馬。剣の腕は確かだが・・・・頭がカラだ。」
「アハハハハハ、皆さんよろしくぜよ。」
「辰馬か久しぶりだな、エリザベスの件の時も直接は会わなかったな」
「ヅラじゃないきに、久しぶりじゃのぉ」
「ヅラじゃない桂だーーーーーー！！」
桂は辰馬にアッパーカットをする。
「そのニックネームで呼ぶなと昔から言っておろう」
とまあ、辰馬のお陰で無駄な時間を消費してしまい、ようやく次の話に進む事が出来た。

「で、此処にいる、諸葛亮孔明と鳳統士元が軍師希望で仲間になりたいらしいそうだ。」
「何、諸葛亮と鳳統とな、この者達がか、銀時！？あ、あの俺桂小太郎と言います。あの、握手とサイン下さい。」
「はわわ」
「あわわ」
「オイ、コラヅラ二人が動揺しているじゃねーか」
「おっと、すまぬ。なにせ俺の尊敬している人物に会ってしまって、はしゃぎ過ぎた。すまぬ二人とも。」
頭を下げる桂に動揺する二人。

「はわっ、そ、そんな事ないです。頭を上げて下さい。」
「ん？そうか、ならなぜ仲間になりたいか聞きたいのだが・・・」

二人が緊張しながらも話終える。
「つまり、世の中を変えたくて私塾を飛び出してきたとねー。まぁ、いいンじゃね。仲間になって貰っても」
「そうだよ～人数は多い方がいいしね」
「ご主人様、桃香様・・・・はぁ～」
「愛紗殿は納得していない様だな、なら俺に考えがある。」
桂はそう言って机と椅子を用意し、二人に座る様に言うと桂も二人に対面する様に椅子に座った。

「じゃ～ハイ、今から面接するから履歴書出して。」
「な、何ですかそれ？」
「生まれた年、特技、学歴を記入してある書類の事だ。まさか、履歴書が無いのか？」
二人はゆっくり頷く。
「それで、面接しようとしのか！それで簡単に攘夷志士になろうとでも思ったのか！？」
桂は立ち上がり言うが、銀時は桂の頭を押さえて机に叩きつけた。
「だ～れが履歴書必要だと言った。それに、攘夷志士って完全にテメーの私情が入ってンじゃねーーーーか！！勝手に話進めてンじゃんねーーーよヅラ！！」

「あ、あのご主人様。」
「何だ？愛紗」
「桂殿気絶しているみたいで聞こえてないようです。」
よく見ると桂の頭から血が出ていた。

銀時は気絶した桂を引きずってテントに運ぶ。
そして銀時は、桃香達の所に戻って来て
「皆、今の事は見なかった事で・・・・・」
「えっでも、今ご主人様今桂さん気絶してたんじゃなくて死んでたよねぇ!?ご主人様?」
「イヤ、違うぞ桃香。ヅラはたった今天寿をまっとうしたんだ。もう忘れろ・・・・な。」
銀時はその話をすると銀時の後ろになにかオーラが・・・・
「ご、ご主人様・・・・う・後ろに・・・・・」
愛紗が怯えながら銀時の後ろを指差す。
「えっ?後ろが何だって?」
「後ろがすごい事になっているのだ」
「鈴々まで、俺がそんな子供騙しに引っかかる訳ないジャン。」
「いやいや、銀時何だがお前の後ろにヅラそっくりのスタンドみたいなのが見えるぜよ」
辰馬は普通に話す。
「えっ?ばばばっばばばば、馬鹿言ってンじゃねー。なァ?二人とも。」
「はわわ、う、うひょじゃ無いですぅ」
「あわわ、逃げて下さい。」
諸葛亮も鳳統も怯えている。
「う、嘘だろ?じゃあ言うなら振り向くぞ、せーの!で振り向くぞ・・・・・せーの!!」
其処には桂のスタンドもとい生霊がいたのだ。
「ぎゃあああああああ!!スタンド温泉以来!!ヅラのスタンド登場!!こここここここう言う時こそあああああアレだ。そそそそそその『千の風になって』!!」
銀時がそう言うとイキナリ『千の風になって』を歌い始めた。（未

だうる覚え）
暫くすると桂の霊体が消え始めてきた。
「せんのか～ぜ～に～「銀時！！」せんのか～ぜ～に～な～て～「ねぇご主人様！！」●▲～■※？～「ご主人様桂殿が消えかかっています！！」」
銀時を止める白蓮と桃香と愛紗。
銀時は歌を歌いながらテントに向かう。そして、桂を蘇生させる為に何度も往復ビンタを繰り返すしなんとか桂は蘇生し、桂の生霊は消えた。

「ん？随分騒がしいな、白珪殿」
声のする方を向くと、そこには水色の髪の少女がいた。
「それより、白珪殿、少し話があるのだが」
「何だ？」
「援軍の来たようですし、黄巾党を倒す策を聞きたいのだが、さすれば私が先陣を切りあなたに勝利をお贈りしましょう。」
「また、始まったか・・・・・」
「敵は烏合の衆一騎当千の者に当れば恐れて総崩れでしょう。」
その後も白蓮と少女の口論は続き、少女は一人で乗り込むと言って去っていった。

「いつも、あーなのか？」
「まぁ、そう言う事になるな。」
「「「「・・・・・・・誰アレ？」」」」
銀時、桃香、愛紗、桂が同じ事を口にした。
「アイツは趙雲だ。今は私の所で客将をしている。」
「へ～趙雲ね～。」
「ご主人様珍しく驚かないんだね？」
「驚くつーか、もう驚くのに疲れた。」
銀時は頭を掻きながら答える。

「さっきの話に戻るが、愛紗はこいつ等に軍師としての実力がありゃ、何も文句はねーんだな？」
「まあ、そう言うことです。」
「だったら、この戦の指揮はこの二人に任せてみようじゃねーか。」
「あ、私賛成～」
「鈴々の良いと思うのだ。
桂も頷きその案で決めることになった。

半刻後、黄巾党が合流して攻めて来た。諸葛亮と鳳統は作戦を考え出陣する事になった。
辰馬にはまだ事情を話してないので、本陣に待機する事になった。
「お兄ちゃんどうしたのだ？」
「ン？ああ、悪ィ鈴々俺ちょっと用事出来た、先に言っててくれ」
「ん～何だか知らないけど、分かったのだ。じゃあ、また後でねお兄ちゃん。」
「ああ、」
鈴々と別れ銀時は急いで馬を走らせた。

趙雲ｓｉｄｅ
趙雲の足元には趙雲が倒した敵で身動きがしにくくなっていた。
「倒した敵に足場を取られるとは・・・私としたことが！！」
必死に応戦するが足場が安定しにくいため槍が振るいぬくい。
「もはや、私もこれまでか」
敵が一斉に切り掛かる、一瞬死を想像した時、本陣の方角から何かが飛んで来て、それが敵に命中した。
趙雲が敵に当った物を見るとそれは、洞爺湖と文字の彫られた木の刀だった。

趙雲が木の刀が飛んで来た方向を見るとそこは、
敵が中を舞っているのが見えた。
敵の間に微かに見える人影、それは趙雲が先ほど会った、銀髪の男だった。
男は敵を切りながら趙雲の下まで来たのだった。
「よォ、大丈夫か？」
男は木の刀を拾い声を掛けたのだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「よォ、大丈夫か？」
銀時は趙雲に声を掛ける。
「ああ、確かお主は劉備殿の・・・・」
「一応、主だ。」
「では、貴方が天の御使いか？」
「まあ、そう言うとこだな。」
銀時は拾った木刀を腰に差し、刀を右手に持ち替える。
「たっく、無茶する女だぜ、そんなンだったら嫁の貰い手ねーぞ！
まあ、俺の知ってる奴等よりはいい方だけどな」
「フフフ、そう言われたのは、初めてだ。自己紹介がまだであったな、私は趙雲字は子龍。」
「俺は、坂田銀時。気軽に銀さん、とか銀時って呼んでくれや。・・・・とっ話は此処までにするか、どうやら敵さん俺達が話し終わるまで待っててくれそうにねーしな。」
「その様ですな。」
銀時と趙雲は敵の方を向き構える。
「無理すんなよ！趙雲。」
「星だ。」
「ン？」
「私の真名だ。助けてくれた恩人だ。私も貴方の武を認めたのです

よ。」
「ンじゃ、改めて無理すんなよ！星！！」
銀時が先に敵に向かい敵を倒して行く、それに続いて星も息を整え銀時の後に続く。
「とおおおおりゃァァあああああ！！」
銀時は刀を右に薙ぎ払い、次に左足で敵の腹を蹴る。
その戦いを見ていた星は
「ふむ、見たこともない闘い方をする方だ。めちゃくちゃ、だが強い！」
星も銀時に遅れを取らずと敵を倒して行く。
銀時と星の闘いを見ていた後方の敵は恐れて逃げていった。
戦が終わり、星と一緒に本陣に戻った銀時だが、愛紗に単独行動と主である自覚を持つようにと小一時間説教させられたのだった。
夜になり、宴をする事になり鈴々と辰馬は喜んだ。

「ご、ご主人様ソレは何ですか？」
愛紗はおそるそる銀時が食べている物を聞く。
「コレか？コレはな、俺が独自に編み出した料理。その名も『宇治銀時丼』だ。美味いぞ食うか？」
「イヤ、結構です。」
「で？趙雲、お前が食べているのは何だ？」
今度は白蓮が星に食べている物を聞く。
「この料理ですか？コレは私が旅で手に入れた絶品のメンマを白いご飯にのせた『メンマ丼』ですが？どうですか？白珪殿も一口？」
「イヤ、私は遠慮しとく。」
「そうですか」
それを見ていた、桃香と桂は
「ご主人様って甘い物好きなの？」

「ああ、医者に控えるよう言われている様だがアイツはそれを気にしていない。と言うか趙雲殿も変わった者だな」
「そうだね・・・・」
そう言う会話があった事は本人達には内緒だそうだ。

翌日、星が諸国を旅すると言い白蓮の下を去る事になった。
「お前も忙しい奴だな。主人探しの旅するなんてよ～」
「そうですな、だがこの目で見ておきたいですから」
「まあ、旅しても仕える人がいなかったら、私達の所に来て欲しいな」
「そうなった時は頼みますぞ」
そう言って趙雲は　旅立って行った。

「さ～て、けーるぞ！」
「そうですね、ご主人様には書類を片付けてもらわねば」
愛紗は政務の事を銀時に言い。城に戻った数日間銀時は外に出られなかったそうだ。
そうして、新たな仲間諸葛亮と鳳統の実力も皆理解し、それぞれ真名で呼び合えるまでの信頼を得た。

？？ｓｉｄｅ
「ほら、行くぞ刹那」
「待てよ、高杉」
荒野を歩く二人は銀時の戦友、高杉普助と元赤鳳隊の相楽刹那だった。
しかし、この高杉は違う外史の高杉だと誰も知る良しは無かった。

第九訓：団体行動はきちんと守りましょう。（後書き）

三年Ｚ組　銀八先生

「はい、さっそく質問。『ヨッシィ～♪♪♪』さんからの質問。高杉って出るのですか？」

「ではお答えしましょう。二人出ます。一人は銀さんが居た世界の高杉で、もう一人が別の銀魂世界では銀さん達が攘夷戦争で死んでいます。この高杉はすっごい仲間思いで攘夷なんか考えていません。ね？ややこしいでしょ？」

「今日は此処まで、宿題を答えてくれた『神楽』さん次回には名前を選んで発表します。ではまた見て下さい。ジャンケン～・・・・パ～。」

第十訓：同窓会で会うと昔の面影が無くなっている奴っているよね。（前書き）

作者からのお知らせ
オリキャラ登場しました。
後、バトルシーン・ラブシーン書くの苦手です。
後、周喩の字が間違ってますが、検索で探しても見つかりませんの
でもし、良ければ感想で検索方法を教えて頂けたらと思います。
また後日書き直します。

第十訓：同窓会で会うと昔の面影が無くなっている奴っているよね。

久々に銀時が外出すると桂の店が『ネットカフェ☆喫茶☆桂』に何となくグーレートアップそていた事だ。
銀時が外出して直に愛紗は寝込んでしまったがとか
店の中は何故か『んまい棒』が売ってある。
「何処で仕入れたンだよ・・・ヅラの奴」
そうツッコミながら店へン入ると客で席が満席だ。
「よう、ヅラ儲かってるな～オイ」
「ン？銀時かすまんが今手が離せなくてな」
「アハハハ、よう金時久しぶりだな～ぬしゃァ、やっと外出出来る様になったのか？」
辰馬は店でのん気に笑いながら『んまい棒』を食べていた。
「金時じゃなくて銀時だ！！で？お前はタダ椅子に座ってるだけで何も手伝ってないと・・・・」
「わしゃ、難しい事は苦手じゃきに」
「銀時！！辰馬話すなら外でやれ！外で！！」
料理を運びながら文句を言う。
仕方なく銀時と辰馬は外に出る。
「つってもねー。もう大体街は見て回ったし暇じゃね。」
「あっお兄ちゃんだ。おーいお兄ちゃん！」
向こうから兵士を五人連れて鈴々がやって来た。
「よう、鈴々仕事か？」
「うん、怪しい奴を見つけてお城に連れてくとこなのだ。」
「へ～、どんな奴だ。」
「お兄ちゃん気になる？」
「ああ」
じゃあ、見せて上げるのだ。と言い兵士が連行中の者を連れて来た。
「こんな人達なのだ。」

「・・・・・・・・・・・・・」
銀時は言葉が出ない、何故なら其処に居たのは銀時が良く知っている。ダメガネもとい志村新八だった。
「新八ーーーーーー！！嘘！！何でお前が此処に居るンだよ」
「ン？あっ銀さん！銀さん良かった無事で・・・・じゃ無くてこの人達何とかして下さいよ」
「あーーー、そこの人達コイツ俺の知り合いだから放して上げなさい。」
銀時が兵士に言うと兵士は街の警邏に戻っていった。
「つーか、新八如何してお前がこの世界に？って言うか後ろに居る3人誰？」
銀時は新八の後ろにいる三人の少女に指を指す。
「何故だか知らないけど目が覚めたら荒野に居たンです。でこの人達は右から張角ちゃん、張宝ちゃん、で張梁ちゃんです。まあ、詳しい事は後々お話します。」
銀時は三人から何となくだがアイドル的オーラが出ている事に気付く。
「ねーお兄ちゃん。店の前に行き倒れてる人が居るよ。」
「ほーとけ、その内動く。」
以外に冷たい事を言う銀時。
「あれ？銀時コイツよく見たら、刹那じゃないきに？」
「ンなバカな事あるか！アイツは死んだンだよ！」
ガシッィィィィ
生き倒れている人物が銀時の足を掴む。
「人を勝手に殺すなよな銀時・・・・・」
「あら・・・まァ、刹那君お元気そうで何よりだ。」
刹那と言う人物からは般若の青白いオーラが見えてくると、その場に居た全員が凍りついた。
その直後に銀時が悲鳴を上げた事はその後誰も口にしなかったとか。
「まったく、人を勝手に殺しやがって、こっちは散々探したンだぞ

オイ」
店がひと段落つき店の中で話して居た。
「で？相楽さんは銀さん達とどう言う知り合いなんですか？」
「コイツ相楽刹那は俺達と同じ元攘夷志士だ。」
桂は刹那事を話始めた。
「情報網は俺達の中で最も秀でていて、それ以外は放浪癖があって偶に行き倒れる奴だ。」
「オイ、何だよその紹介、俺の良い所一つしか言って無いじゃん！」
「と言う訳でコイツは怒らせると怖いから皆気を付ける様に」
「オイ、無視か！何だよ数年ぶりに再会した友達にどう言う態度とンだよ！！」
なんやかんやで、話はまだ続きそうだ。

一刀ｓｉｄｅ
「ハア～何でこんな事に・・・・・」
「まあ、人生生きてりゃーこんな事もアルネ。一刀」
そう、今一刀達は牢屋に居る事だった。
「何でお前はこんな状況でメシが食えンだよ！」
食事が出され、牢に閉じ込められているにも関わらず神楽は兵士にお替り宣伝を連呼していたのだ。
「かの有名な武蔵がこんな一言を残してるネ『食える時に食っとかないとね！』って、ホント良い事言うアル」
「つーか誰だよ！その武蔵って！！」
「私の住んでいた街、かぶき町にリヤカーにダンボールの家を作って『マイスウィートホーム』と呼んで暮らしてるネ。別名『ダンボールの妖精』アル。そもそも心が綺麗じゃなきゃ見えないネ。」
「で？結局何なんだよ！その人！！」
足音が聞こえ話をやめる二人。

「孫策様がお前達に会いたいそうだ。ついて来い！」
二人は王座に連れていかれ、其処に居たのはピンクの髪をした女性だった。
「あなた達が不振な者達ね。見たことない格好をしてるけど何処から来たの？」
「えーと、日本です。」
「右に同じであります。大佐！」
「ふーん、でどう思う、冥林。」
ピンクの髪の女性は隣にいた黒髪の少女に聞く。
「私の予想だけど、あの男もしやもう一人の天の御使いじゃないか？」
「天の御使と言うと管檐の占いに出てくるあの銀髪の男と輝く衣を着た少年のアレ？」
「そう言う可能性があると思うだけだ。」
「本人に聞いてみるのが一番ね。」
ピンクの髪の女性は微笑み一刀達の方を向く。
「ところで貴方の名前は？」
「北郷一刀です。」
「変わった名前ね。それで貴方が着ているその衣何の繊維で出来てるか言える？」
「この制服ですか？これはポリエステルで出来てるだけなんだけど・・・・・」
段々と確信に近付く。
「ぽりえすてる？どうやら名前と着ている者からしてどうやら本物の様ね。」
「その様ですね。」
「あの～何を話しているんですか？」
ピンクの髪の女性は一刀に占いの事を話し、一刀が本物だと言う過程が確信に変わった。
「それで、俺がその御使いだと言うんですか？」

「そう、で気になっていたんだけどその女の子は貴方の恋人？」
「はあ？コイツはタダの召使よ！コイツはね前世は私の犬だったのよ！！」
神楽は何時もの口調ではなく、有名な某ツンデレキャラの口調になっている。
「お前誰だ！？分かった。お前雅彦だな雅彦、神楽を出せ」
「人を勝手に多重人格設定してンじゃねーヨ！！ちょっと虫唾が走って言っただけネ。」
一刀に蹴りを食らわしながら言う。
「此処で白黒つけるのも丁度いいネ。オイ、其処の胸デカ娘共耳かっぽじってよく聞くネ。コイツは私の弟子アル。それ以上でもそれ以下でもないアル。」
ピンクの髪の女性の隣に居た黒髪の女性は驚いた。
王の前で暴言を吐くなど世の中そうそう居ない者だろう。
「面白い子ね。で貴方の名前は？」
「神楽アル。別名『かぶき町の女王』または『名前を言ってはいけない例のあの人』って呼ばれているネ。」
「オイ、ちょっと待てええええぇぇぇ！！一つ目はこの前聞いたけど、二つ目明らかにお前の事じゃねーだろ！！自分で思ってるだけだろ！！！」
凄い勢いで神楽にツッコム一刀。この所神楽と行動してたせいかツッコミが日々上達してきている。
「じゃあ、神楽ちゃんでいいかしら？」
「別に何でもいいアル。」
「自己紹介がまだだったわね。私の名は孫策字は伯符。」
「私は週愈字は公勤。」
「孫策に周喩だって！！」
二人の名前を聞き驚く一刀。
「誰アルか？」
まったく知らない神楽に一刀が小声で言う。

「三国志に出て来る呉の主要人物だよ。」
「おお！三国無双に出て来るアレアルか？でも無双に出てきたのはむさいオッサン達だったヨ。」
「そう何だよ。考えられるのは此処が三国志を基にしたパラレルワールドって事しか考えられないんだよな～」
「そう言う事にしとくアル。」
秘密の会議は終了し孫策の方を向く。
「それでね北郷、貴方を保護しようと思うのだけどでも条件があるの。」
「で条件と言うのは？」
それは、一刀が孫呉に血を入れると言う条件だった。
「・・・・つまりは口説いてまぐわれと仰るんで？」
「そう」
「如何しよう？神楽？」
一刀が神楽の方へ顔を向けると唾が飛んで来た。
「ペッ・・・・・甘い言葉言えば簡単に女落とせると思ってンじゃねーぞ！コノ顔面●●●ヨヤローが！！ペッ！」
最大の一言を言うとまた神楽は一刀に目掛けて唾を吐いた。
「まあ、本当に好きになって、告白しますよ。」
「これなら銀ちゃんと居た方が５００倍マシアル。」
「そんなに俺と居るの嫌なの！？」
一刀は唾を拭きながら言う。
「アハハ期待してるわよ。」
神楽は辺りを見渡していた。
「何してるんだ？神楽」
「いや、孫家なのにアイツがいないアル。」
「アイツって誰なんだ？」
「孫悟空の事ヨ。」
「それ違うから！同じ孫でも悟空は架空の人物だから！！」
一刀が説明してると神楽は王座から出て行き直に誰かを連れて帰っ

て来た。
「嘘付け、ちゃんといたネ。悟空アルヨ。何かちょっと違う様な感じが少しするケド。」
「そんなバカな・・・・ってアンタ誰！？」
「オッス、オラ小林。ワクワクすっぞ！」
神楽が連れて来たのは道着に『林』と書かれた服を着た青年だった。
「小林って誰！？つーかどっから現れた！！？」
「なあ、もう良いか？グリリンを生き返らせる為にズルズルボールを探さなきゃなんねーんだ」
「ズルズルボールって何！？つーか忙しいンだったら帰れよお前！！敵を見つけてテキトーに闘っとけ！！！」
その一言を言われた小林は涙目になりながら王座から出っていった。

sideout
「新八・・・お前この世界に来てまで何やってンの？」
「僕はあいつ等に親衛隊の心得を教えただけです。」
「それがどうでもイイ事なンだよ！！」
新八にこの世界の事を説明し、新八のこれまでの事を話してお互いに大声を出す。
「まあまあ、落ち着け銀時、話を戻すが今俺達が此処にいるという事は誰かが仕組んだと俺は思うンだが・・・・ヅラお前はどう思う？話を元に戻そうとする刹那。
「俺にも皆目検討もつかん。もしかすると高杉の仕業かもしれんな」
「それはないと思う。３日前に逸れたがアイツ昔よりなんか明るくなってたぞ。」
「「「えっ！？」」」
銀時・桂・辰馬が驚く。
それもそうだ、紅桜の時に会った時は完全に敵だった。

その事を刹那に話すと、「アイツの顔見てそんな感じじゃなかったぜ、むしろ仲間救えなかった事を後悔して『アイツ等の分まで俺は明るく生きる！』って言っていたぞ」
銀時達の話と刹那の話では全然違っていたのだ。
「ご主人様！！」
愛紗が走って来た。
「おお、愛紗。如何したんだ？」
「袁召から文が届きまして暴政を働く董卓を倒すために連合に参加しろとの事です。・・・・でそちらの方達は？」
「こいつ等も俺の仲間だ。新八紹介するぜ。関羽だ。」
「っえ！！関羽あの！？」
「ああ、我が名は関羽。字は雲長。桃香様の一の家臣。」
新八は愛紗を見て顔を赤くする。
「新八、何お前赤くなってンの？」
「愛紗殿、新八君と刹那を軍議に参加させても良いがろうか？」
「この二人をですか？」
愛紗じゃ刹那と新八を見る。
「うむ、この刹那の情報は殆ど正確なものだ。」
「分かりました。桂殿が言うなら。」
それから城に戻り新八と刹那は自己紹介をし、連合に参加する事に決まったが、それを決めたのは銀時と辰馬以外だった。

？？ｓｉｄｅ
「この連合で我が軍の力を見せ付けるのじゃ」
「よっ！この三国一の天才！！」
「あーあ、かったり～。旦那達はこの世界に来てないですかねィ？出来れば一緒に行動したいな～」
そこに居たのは『サドスティック星の皇子』の異名を持つ、真選組の一番隊隊長。沖田総悟だった。

「聞いておるのか？沖田。」
「はいはい、聞いてやすぜ～」
そう言いながらアイマスクを付ける総悟だった。

sideout

第十訓：同窓会で会うと昔の面影が無くなっている奴っているよね。（後書き）

教えて
三年Ｚ組☆銀八先生
「先ずは、『ヨッシィ～♪♪♪』さんからの質問。エリザベスってまた出ますか？あと、屁怒絽様って出ますか？ハイ、お答えしましょう。・・・・今の所桂がエリザベスに変装する予定です。あと屁怒絽伯爵は作者的に出したいのですがちょっと出したら街の皆が怯えるので難しい所です。

「次の質問。『ブービー』さんからクレしんとのコラボですけど、嘘予告ではなく本当に書いて頂くのは駄目でしょうか？　そこんとこお答えしましょう。作者も書きたい所ですが、まだ迷っています。読者の皆様が見てみたい！！と言う感想が１０件以上こえた場合連載を考えています。」

「そんじゃ、今日は此処まで！小林後で北郷にノートを見せて上げなさい。」

小林「オッス。」

北郷「だから誰だよ！！お前！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1144h/

真・恋姫無双～ドキッ銀さんと一刀の三国生活～

2010年10月9日01時43分発行